遷、多賀信仰の發展を文化史的に考へるといふ結果に持來されてゐるのである。(菊版二〇九頁、附錄一三三頁、圖版二十葉、非賣品、大岡山書店)〔時野谷〕

◉離宮八幡宮史

魚澄惣五郎
澤井浩三著

東海道線京都大阪の中間山崎驛に間近く鎭座する本宮は、數年前鐵道用地として境內の半ばを失つた。こゝに三府の製油業者有志が境域改修參賛會を組織し、社殿の改築・造營等の事業を起されたが、之を機緣として宮史の編纂が企てられる事となつた。かくて先に「古社寺の研究」を物された魚澄氏の圓熟した學問と、中世社會史を志す新鋭の學徒澤井氏の眞摯な研究と相俟つて、最も信頼すべき宮史を得た事は喜びにたへない所である。

當宮の所在山崎の地は上古より淀川流域の河港として聞え、京都といふ中世日本の心臟部の門關をなす要地であり、交通・經濟・軍事上等各方面に於いて、此の土地の中世史上に持つ意義は重大なものがあつた。本書はかゝる點に留意して、神社の歷史を述べると共に、常に大山崎の歷史地理的考察をなす事を忘れてゐない。

吾人にとつて最も興味あるものは油座としての大山崎神人の活動である。社寶の中心をなす古文書は殆んど全部此の事に關する所のもので、座の研究者の必ず引用するものであつた。今回は其等既知のものゝ他に、更に整理の分六十八通、他に當宮社家疋田・井尻兩家の文書記錄を採訪されて從來の研究に一歩を進められた。

座としては北野麴座・興福寺の兩門跡座・祇園綿座等が知られてゐるが、山崎の油座の如く鎌倉から織豐時代迄連續した史料を有するものは極めて稀である。且、その活動範圍が京都・近江・丹波・攝津等畿內を中心に、北陸・尾張・備前・阿波・肥後等遠隔の地に迄及んだ事は他に見られない所であらう。

かく座の研究にとり、最も重要なものに關し、現在なし得る限りの詳細な記述がなされてゐるから、その一々の紹介は到底限られた紙面上許されない所である。こゝには唯座は組合であるとの說を守つて、神人の團結に關して說いてゐる事を注意して置かう。

尙祭儀と神事に關しては日輪御移座の故事に則るといふ「日使頭祭」息長足姫尊が鉾紫に於て始め給うたといふ怨敵退散の大御神樂等があり、細男の神・人形等が用ゐられてゐる。此方面の研究に一史料を提供するものであらう。

重要な史料は卷頭に圖版として多數挿入されてゐて、研究者に多大の便宜を與へてゐる。

本書は非賣品であるが、別に「離宮八幡宮と大山崎神人」といふ名で京都星野書店より出版される。裝幀は此種のものに見られぬ淸楚な、感じのいゝ出來映である。(菊判百三十六頁、圖版二十一葉、賣出される分は百二十頁。貳圓)〔淸水〕